



ピッポ新聞

2013
3
No.266

編集・発行 子どもの本専門店ピッポ&ピッポ古書クラブ
編集者 伊藤倭男

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail itoh@pippo.co.jp

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

スイスへいつてきたよ (その4)

さー、いよいよ

「オーバーロートホルン」へ出発だ。

今日の予定は、スネガといつところまで地下ケーブルで行き、そこからロープウェイを二つ乗り継いで、標高3103メートルのロートホルンまで行く。そこから3415メートルのオーバーロート



地下ケーブルカーは、スネガまでトンネルの中を一気に登る

トルよりは低い、2番目の北岳(3193メー

ホルンまで登り、スネガ(2288メー

トル)まで歩いて下ってくるというものだ。高度だけでいうと、3415メー

トルは、日本の山では一番高い富士山の3776メー

トルよりも高いのである。

歩く距離は約10キロで、ゆっくり歩いて4時間くらいみればだいじょうぶだろう。明日のための足慣らしと、高度順応にはじょうぶよ。

途中、例の橋まで来ると朝から多くの日本人観光客がカメラを構えていた。その方向を眺めると、「わあー」今朝はマッターホルンがその全容を見せてくれている。光の中に立つそれは、神々しいほどだ。

「ゴルナーグレート」鉄道の鉄橋をくぐったところで振り返ると、マッターホルンがあまりにも美しかったので、我慢できずにカメラを取り出してこれを撮った。

地下ケーブルカーの駅では、ロートホルンまで片道切符を買った。切符売り場の窓口は小さく回転ドア形式になっていて、日本のように直接係にお金を手渡すことができない。これはスイスではチューリッヒの市立美術館を含めて、ほとんどの窓口がこの形式だった。ほとんどの場合はいちいち頭の中で英語でどういえばよいか考えて係に伝えるのであるから係もイライラすることだろう。

「くんないつだ。 to Rothorn one way please」 たったこれだけの片言英語なのに頭の中で考えなければ出てこないのだ。すると相手はいくらであるか窓の向こうで言う。たいがい一回ではわからないので「one more please」と聞き返すことがほとんどだ。窓口は回転ドア形式であるから、お金をそこに載せて向こう側に届くように半回転させると、今度は係がチケットとお釣

りを回してよすのである。

改札を出ると、ケーブルカーに乗る場所まではトンネルを歩くようになっていた。ケーブルカーはトンネルの中の急こう配の線路を相当のスピードで走り、5分ほどで、スネガに到着した。スネガで今度はロープウェイに乗り換えて、さらに高みへ進む。

ロープウェイからはマッターホルンをはじめ周りの山や氷河が、これでもかという感じでその姿を見せてくれた。

今日は心も天気も最高だぞ！

途中でもう一回、今度は大型のロープウェイに乗り換えてロートホルンについた。ここでも360度の展望を楽しんでから、オーバーロートホルンへ向けて第一歩を踏み出したのだが、不覚にも涙があふれ出てきてしまった。

これは、景色があまりにも美しいためなのか、



長年の夢が実現したためなのか、はたまた年を取ったために涙腺が緩んでいるだけだったのかは、いまだにぼくは理解できない。スイスに在る間の涙は、これ一回だけであったから、

不思議だ。

日本でもそうだが、すでにこの高度は森林限界を超えているから、周囲はガシタの花、左、ハイキングコースを示す標識、およその時間や難易度もわかる。



右、過酷な環境の中で咲く高山の花。左、ハイキングコースを示す標識。おおよその時間や難易度もわかる。そんな中をよく見ると所々に、高山植物が地面にへばりついている。多くの花が咲き乱れる山のお花畑もいろいろ、こんな環境に咲く花が好きだな。

ハイキングコースはいくつも伸びているが、道は明確であり、矢印のついた標識もしっかり立っていた。標識に従って道をたどった。途中でスネガ方面へ下って行く道と、オーバーロートホルンへ登っていく道とに別れた。

山道をゆっくり登っていると、あとから来た青年が、「ハート」といって追

い越して行き、たちまち見えなくなってしまうた。

今度は上から4人連れの婦人が下りてきて、英語で「日本人ですか」と声をかけてきた。「そつだよ」と日本語でこたえると、たちまち婦人はおばちゃんに変身して「わたしたち名古屋から来たんだけど、ロープウェイなんか使わずきじやないから、ブラウヘルト(ロープウェイの途中駅)から頂上まで歩いたの……」と、一方的におしゃべりが始まった。

ぼくが「昨日ツェルマットに着いたばかりだ」というと、それは親切にあそこがいいから行ってみたらなどと、

どうにもおしゃべりが止まらない。適当なところで、「いろいろ、ありがとうございまして」と話を打ち切った。



オーバーロートホルンの頂上で、スイスの青年に撮ってもらった。

オーバーロートホルンの頂上で

名古屋のおばちゃんたちとわかれて、さらに登って行った。周りの素晴らしい景色を見ながらだったので、疲れることも、

あきることもなく、充実感だけに満たされて歩いた。やがて、頂上に着いた。頂上は細長く少し斜めに傾斜していた。そこには、ぼくを追い越していった青年が一人でくつろいでいた。

しばらくは360度広がる展望を味わった。ここでは言葉は何もいらなかった。ただ見ているだけで、満たされるのだ。

青年の近くまで行くと、彼は微笑んだ。その微笑みは、この素晴らしい眺めを共有していることへの喜びに対する暗黙の共感を表したものだと思はくは理解した。



この青年はスイス人だった。周りの写真撮っている、ぼくの写真を撮ってくれるという。カメラを渡すと、背景の山を変えながら何枚か撮ってくれた。

そのあと、彼は山を指さし山の名前を教えてくださいました。目の前には4千メートルを超える名峰が連なっている。あれがモンテローザで、隣がリスカム、次がカストールで次がポリュクス……。ぼくが自分で判別できたのは



明日登る予定のブライトホルンとマッターホルンだけだった。しばらくすると、ほかの人も登ってきた。まだ景色を楽しんでいる青年にお礼を言いつて、下山することにした。

後から登ってきた人の中に日本人の若い夫婦がいた。彼らが、シャッターを押してほしいと声をかけてきた。マッターホルンをバックに数枚撮ってあげた。彼らと少し話をした。

話している途中で、向かいの谷から雷のような凄惨な音が響いてきた。音のした方向に目をやると、岩が崩れ落ちていた。それはすぐに雪の斜面に吸収されておさまった。人間がいかに山を愛でようが、山はいつ豹変するかわからない心しよつ。

逆さマッターホルンに見えるかしら

若い夫婦は、ロートホルンからロプウエーでスネガへ下山するといつ。彼らとわかれて、ぼくは

下りのハイキングを開始した。

道は下るにつれて、岩がちの景色から、草原に変わってきた。そこは多くの高山植物が咲き乱れる草原であり、牛や羊の放牧のための牧草地。これをアルプといつてもある。首にベルをつけた二〜三十頭の羊が自由に草を食んでいた。



途中に、この下にはマーモットがすんでいるという標識も立っていた。回り込んでみると、巣の入口らしい穴があったが、かれらには出会ふことはできなかった。

水面に小波がたち、逆さマッターホルンは良く映らず、マッターホルンも午後になって出てきた雲で上部が見えない

やがて道は、シュテリゼーという小さな湖(ゼー)とさすへ出た。この湖も逆さマッターホルンを見ることができた。

この辺りまで来ると、この逆さマッターホルンを見るためにスネガから登ってくる日本人のツアー客が多く目につくようになった。



アルプスを代表するエーデル



スネガが近くなると、はるか下方に、ツェルマットが見えてきた。

出た。ここでも多くの日本人が景色を楽しんでいた。テラスでコーヒーを飲みながら、ふたたび雲が取れて、その全容を現したマターホルンの優美な姿を堪能し、スネガから地下

ハイキングコース上の花の種類も増えてハイキングを楽しくさせてくれる。湖を過ぎて少

し行くと、アルプスを代表する花、エーデルワイズを見つけた。それはここに一株、あそこに一株と遠慮がちに咲いていた。いまやこの花もアルプスから減少しているのだそうだ。

やがて、スネガについた。するとそこで偶然にも、先ほどオーバーロートホルンでいっしょだった日本人の若い夫婦と再会した。

立ち話の後、地下ケーブルに乗るといつ彼らと別れ、展望台のテラスに

ケーブルでツェルマットに戻った。

年だからスローで登ってね!

一度ホテルへ帰って一息入れてから、ガイド組合へでかけた。昨日の女性がいる窓口で「昨日ブライトホルンのガイドをお願いしたのですが」といつと「oh yes」で、お返事は、「伊藤です」。昨日はあまり簡単だったので、話を通じているか不安だったが、どうやら大丈夫なようだ。

たしかこのとき、パスポートも見せたように思うが、はつきり覚えていない。彼女はガイド料が185フラン(1万5千円ぐらい)。もちろんこれはグループガイドの一人分の料金で、もしプライベートガイドだとこの3倍ぐらいかかる、だと言う。代金を支払うと、予約の紙(パウチャー)を渡してくれた。そこにはぼくの名前が打ち込まれていた。それはドイツ語と英語で書かれているようだが、内容はよくわからない。宿に戻ってからよくみてみよう。

さらに彼女は、クランボン(アイゼンのこと)とハーネスとストックとピッケルは持っているかと聞いてきた。こういつと「sure I have them」と、答えればよのだからか? ぼくはただ「yes」とだけしか、答えられなかったんだけどね。

続いて彼女は、「明朝8時までにクラインマッターホルン行きのロープウェイの駅に集合して

ください。そこにガイドが待っています」と言った。当然ぼくは、ガイドの名前を聞いたが、彼女の言った名前がよく聞き取れない。まあ、いいか、どうせ明日集合場所へゆけばわかるからと思ひ、再確認することはしなかった。その足でロープウェイの駅の場所を確認しておくことにした。それは例の橋を渡って、川沿いに上流へ十分ほど歩いたところにあった。ホテルから「近いので、明日は7時半に出ればいいだろう」。

昨晩から、心配なのはガイドとスムーズに「ミネーション」とれるかということだ。それを考えるとなかなか寝付かれなかった。でも最後は「まあ、なんとかなるだろう」といついつもの樂觀主義(いいかげんさ)に落ち着いたのである。

朝7時半朝食をすませて、ホテルを後にした。今朝も食堂はぼく一人だけだった。駅に着くとまずクラインマッターホルンまでの往復切符を買った。スイスパスを見せたら25パーセント引き(495フラン)だった。それから周りを見回したら、こちらを見ている人がいた。近づいてブライトホルンのガイドか聞いたら、「そうだといい」。むこうもすぐぼくの名前を聞き、名前を言ったら、持っているメモで確認し、「yes」といった。ガイドの名前はフルノであるという。

ぼくは何よりも初めに、「ぼくの年齢を伝え」お願いだから。ゆっくりなペースで歩いてくれるようにいった。フルノ氏「OK OK」とうなずいた。それから今日一緒に登る人を紹介してくれた。すでに全員そろっていたのだ。

(続く)